

浪花巫山之夢
卷之九十

2494
5-5



門へ割8
番 2494
巻 5-54

浪美巫山乃愛毛く九

東洋
餘丁町百拾八番地
坪内雄藏

大陰いちごつ味よく者し伊いは巫いの事
并なに 伊い磨い夷い夷いの事

標記之庫津西土所

紫衣長衣

印

以者終乃海雨の而不容易企波人子乃磨
く斗い米いを以い抄い氏いくいのい候いのい偽い唱い々いのい不い存い

集り書籍をとりくお氏も元々お金に合ふるを
 以て此の関潤いさむ平八の二味はあふら雲押
 右代令強りしは若くしを石に能存は初令子
 徳用と申さるる紙と魚の乃いより六の貸金出入
 出候しおあかの方を所下すり此屋亦おいに入
 万方の紙撰は日の方にお紙乃向い行く又たの
 く持打り申す所平八布と申す新式扱言く
 美濃切の流字の紙に申す歌を言はに急く取
 斗と申す多岐を滅く出令と申す徳四海

困窮する暇方徳男く用句てら申方く按書
 一歩一歩の日人申すを如印くよ元不知は
 増令と申す改を以て申す申すと申す徳書
 改問平平八布乃之く頼お申らくお定印は
 改改し申す初と申す始く怪言あつて對心
 行事一実お探お申て海出家。日人よ大事乃左所
 人よ潘右右は長く申す乃尋懐り初め申す
 以て必ず定く申す深く申す業を以て所人乃て申す
 合ふる乃長生。否あは長うく。此申すとて改金

お家持子大和守義久は、
用令口城の程も親中一存の由も
之儀も義久の不由の進を
身は種族移りて、
宿免不智く沙汰

小倉吉布所五丁目

取持 本三清

口所 四丁目

取持 新庄所

南中町五丁目

本知三清傳家

記一三清

傳方所

本三清

右に者多し、
為之、
價之

書以職云矣拂一右代法新牙方人上旅行
改方よりそ似世信者私に言ひ日人お波に旅行
札子より少と好い久良波池をくいとも不の如
併移わく云斗とつわい上六七の如くも言
家一毎日人にお合に遊々く石書籍実
上旅行を世法改を始末少物存之を以て

小名を所ふ丁目
源太の信家
以市三信

け者より上流平以市不容易企行思氏
よく三乃改と對 公儀也多事一丸徳
概よりくく一六八右企番起乃法業の人
下川入斗船を以書籍云矣拂一右代令旅行
偽唱はもさるる存いとも平八市世法教示し為
何名更りの此より編集改ん語を以何氏
字判に振合よ式に字式に六字宛別約
彫刻改養日人美新氏より人上旅行
く日流徳方板行をく彫るく行又も方

人白語行てき申さく石板の彫出の書物文
以度^{いど}為^なり不^ふ容易^{りやうい}多^{おほ}く石^いの^し郡^{ぐん}に^に行^ゆく
再^{また}申^ます仙^{せん}侍^じ共^{ども}は^は之^こ侍^じ子^こ右^{みぎ}企^き取^とり^り記^きの^の書^{しよ}
深^{ふか}き^かか^か三人^{さんにん}一月^{いちげつ}平^{へい}公^{こう}所^{ところ}方^{かた}に^に紙^{かみ}紙^{かみ}行^ゆり
摺^{すり}と^とく^く事^{こと}世^よに^に上^{かみ}日^ひ人^{ひと}後^ご堂^{どう}に^に加^か
古^{ふる}語^{ことば}勢^{せい}に^に申^ます此^{こゝ}方^{かた}左^{ひだり}に^に通^{とほ}り^り知^しく^く語^{ことば}
重^{おも}き^きと^と見^み合^あふ^ふ通^{とほ}り^り申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す
切^きり^り頼^{たの}み^み之^こ為^なり^り以^もて^て保^{たも}つ^つ事^{こと}に^に申^ます^す申^ます^す申^ます^す
押^おし^し深^{ふか}き^き事^{こと}の^の始^{はじ}末^ま不^ふ得^とり^り申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す

石天保九^い成^{じやう}八^{はち}月^{げつ}廿^{にじゅう}日^{にち}江戸^{えど}評^{へい}定^{てい}所^{しよ}
并^{なら}日^ひ年^{ねん}九^く月^{げつ}十^{じゅう}八^{はち}日^{にち}石^い板^{ばん}所^{しよ}評^{へい}定^{てい}所^{しよ}
右^{みぎ}一^{いち}件^{けん}申^ます^す候^{こう}之^こ字^じ

右^{みぎ}一^{いち}件^{けん}日^ひ年^{ねん}六^{ろく}月^{げつ}廿^{にじゅう}日^{にち}江戸^{えど}評^{へい}定^{てい}所^{しよ}
以^もて^て保^{たも}つ^つ事^{こと}に^に申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す
日^ひ月^{げつ}廿^{にじゅう}八^{はち}日^{にち}石^い板^{ばん}所^{しよ}評^{へい}定^{てい}所^{しよ}
以^もて^て保^{たも}つ^つ事^{こと}に^に申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す申^ます^す

東照寺力

大為共之布

東照寺力

在見乃布之布

淨引日心

竹上乃布

淨引山田原

安田不書

此是淨引乃布并
信之乃久難辨

今宿正乃布

乃宿正乃父乃
乃乃在正乃乃

仲秋所
之乃乃乃乃乃乃

日人乃乃乃乃

二因入七人

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

右乃乃乃乃乃乃

堀伊乃乃乃乃乃乃

跡部山城寺乃乃乃

杉浦乃乃乃乃

関根乃乃乃乃

甲門傳乃乃乃

藤久乃乃乃乃

日乃乃乃

日乃乃乃

横山乃乃乃乃

平山乃乃乃乃

清原乃乃乃乃

少村乃乃乃乃

松尾乃乃乃乃

山村乃乃乃乃

打田乃乃乃乃

前田乃乃乃乃

佐門乃乃乃乃

木村常忠魚門
海邊作千席
荒川親藏

七月十六日

封廻状

河川越中守家持
宛
長久

清系依了席
高橋布く允

大坂所奉行

海部山守徳月公

吉見九郎吉郎

市川奉行

上田守三郎徳月公

作上石吉郎

大井徳次郎
高橋正了席

勢州山田守三郎藏

安田系書

海部山城守徳月公

乃為其の席

改揚り屋を云

大坂御掛所

右御所
右房律祿

近江山城守御月公

平山御所

日人少者

多御
承御

大園紀伊守家系
御所を云

智長坂村

阿比寺下化

劉山嶽

一平了尋之工お返

源系坊中

遍照院

志成坊

一平了尋之工お返

右遍照院

竟月

楊本所

彰人坊

次月

右於評定所同於下總守 井上
河内守為井上信忠守 大系能守
田及集人正 池田將監 三月廿

土月廿

評定

評定而面取

山本新十郎

評定而面取
時後三

之記

白石十左史

令或拾友

於大坂表後堂及札坊以有為味
其裁以有之

右於評定所同於下總守 井上
河内守為井上信忠守 大系能守
田及集人正 池田將監 三月廿
平代

酒井石和守

平代 本田三祝

其方家来北院戶月日大坂所寺行
初知山城守能川公平山由京而後日致
以辰家来北院戶月日大坂所寺行
月日致
方家来北院戶月日大坂所寺行

石於水野執前守宅日人月日致
神尾山城守致

八月廿日 泚州信書

泚座之間

土井大炊頭

泚刀馬原圖為定
代令武將致

去酉年於大坂位當之者光及記坊山所 泚城
内并發信于所 堀元系の信與巧の月日致之
右於 泚前相領之

打平甲斐守

去酉年乃坂所寺行初知山城守能川公平山由京而後日致
接し由平長又乃堀平八而致右位當之とのと致

右坂市中 防火及礼坊の所 亡父甲斐守
甲斐守致先出候一候之事

右於印白書院極例老中一列 庄神前守

戸後一

青山因懐守

右於芙蓉之回外座り 吾日人戸後一

乃坂印定為

遠及他馬守

福垣片後守

印瓢池

りぬく所 印候日 警清者 是行恒持

所事以水の邊 一々 池者 尤先 一 研

家為 相作 秋一 用者 係 備方 又 印 示

系 戸 合 以 身 組 一 者 亦 身 命 下 不 顧

お 備 一 候 一 付 一 取 申 事 一 一 一 平 為

一 掛 金 湯 一 一 一 思 一 一 一 一 一 一 一

右於日席一列 在り 吾日人 戸後一

乃坂印定為

根本吾日人

元澤代官五節の所りありて之に事奉する者
天波橋に在りて之に所居ありて其の
一候に事奉す 思ふに此候より守方此所は

澤代官

池田岩くゝ

りありて所建國寺澤宮所居ありて
天波橋に在りて之に所居ありて其の
一候に事奉す 思ふに此候より守方此所は

石於澤代官初を極例例在りて日へ

大坂所定表

在るは但馬守家系

細作秋くゆ

池田源助

りありて所建國寺澤宮所居ありて
天波橋に在りて之に所居ありて其の
一候に事奉す 思ふに此候より守方此所は

乃於將く同列座り而如泉守尸後之

乃後而定焉

遠及他島守御事

坂本將く御

去國の所を以て此如く守御事
其後平下段に從業しとのそ代
中敵火及礼婦等所山城守馬家
進之流砲打之口勢と地勢
既し月日附入大角五坂
者之考成討之り自忽
致礼功ふに成極難く御

依くそ地中流砲方事 伊自席事

伊自見以上く事席とてお心
得は是又別候為し歴災浪
而致多下流所事行新
立上至は平八節而物く大角
一挺も

但伊自宛の事も在る事下

日人記事

本多為御

り給くそ山部山城守事
進之坂本將の合神後
尤方々く消入流砲
亦拂身命

不悔亦御之

伊禮代

伊礼代御之是也
伊礼代御之是也
伊礼代御之是也

但伊礼代御之是也

日之御日公

山崎洋田

禮全御藏

伊礼代御之是也
伊礼代御之是也
伊礼代御之是也

伊礼代御之是也

伊礼代御之是也

伊礼代御之是也

伊礼代御之是也

伊礼代御之是也

伊礼代御之是也

伊礼代御之是也
伊礼代御之是也
伊礼代御之是也

八二九

所定書以陳設

卷和五

中野又三清

右坂所書以山城守銀五力入信極之由
書父入信平八市以右信崇之々々右坂市中
融火及礼妨以許吟味右坂中形以有右之
右於所祐筆初在極例老中列尾部市守是

浪抄取

所定所為役
所定所為役

豊田為之役

川七取

所定所

宮寺五平次

全抄取

山本新十郎

全抄取

所定所

白石十左史

法之取

所定所書也方

高田八右衛門

りあふふとむく

右旅り席わ泉守戸後く

浪花巫女の愛をくす

送家兄く浪花辞

并々筆記く事

りろろりやうるゑく初を未井君に陪従く
浪華のむむんくむんそや同の果くもく
りく序命くく在乃用とあり福の多
妻あけ子とあくまあくく苗のく定を暖以命
なふ香森雨致月暴風とくくく

田畑をなげむを放く種を焚火のせの中
うきふらむ不期ふの葉を焚火をふくく飯を志の
そくろふ不勢の衣をわつくをせとせやく少るを
酒よ種を志くふもせし〜るりもわはるの歌
も〜玉よん焚火を焚くもせしもその物のこ
焚火もむらつき〜のり〜よのたいの別
をう〜〜ま〜おん人の期はわ〜と〜せり
ら〜ると〜侍も〜の〜ら〜る〜命下〜と〜えん
も〜の〜の〜の〜使〜〜せ〜し〜の〜別〜の〜

さ〜〜〜 惜愴のりんや〜〜〜 物や〜〜〜
揚ち〜〜〜 心作〜〜〜 心〜〜〜 心〜〜〜 心〜〜〜
別を送る 辞をう〜〜ぬ

何由なる 養老の君を送る日 湖東

田別 辞

田津のりしげ〜〜年〜〜住〜〜ら〜〜は〜〜ん
よも才湖東の 寓居津川よ 若よ 若を〜
若田よ〜〜〜

未井 君は流花の 没の 津を 月や ぬ〜〜

おのじいといふは、後名から傳見す致多
何れも或るなりと人とうり申すは、新新
しつゝもたつ、測束の朝夕おえて是
よは多々姦しとよつちりまるといふは、
浪華の事と名つらふは、ししつゝもたつ
ふのこその定と名よ百里外の藤原乃と
ふくち源の〇〇列といはるゝとこふは、
一向は源の〇〇の信よとよく山を流して
そくそくたつとらうとそんむとくに源す

かゝく、苗列の一向をとらむ

一此の源とくまらり藤とらむ ね翁

當年一草雨の候、鬼田留穀也、不化記有る
白糸柳り、四合つ、餉麦、飯塚と、搦練馬、ち、振馬人
を、着、着、を、焼、芋、穀、齋、之、悔、分、令、意、在、是、此
年、下、野、為、即、着、元、家、事、也

親方初巻記

浪花の傳、傳、内、東、の、四、少、を、う、つ、つ、角、す、り
と、人、の、女、ら、水、月、う、う、い、ま、人、こ、こ、の、宿、を、

たりししらちねあやうまのこのみたまへる
 如きくそ例よししらちねあやうまのこのみ
 親方初巻より年々は任人代まの御座り
 人もまじくしきくもらひしとて
 人もまじくしきくもらひしとて
 まらうまの御座りしきくもらひしとて
 月印の御座りしきくもらひしとて
 破とけりと補い新しきくもらひしとて
 まらうまの御座りしきくもらひしとて

分連俳狂おぼえよむりまきくアツクもまきく
 まらうまの御座りしきくもらひしとて
 揚子江の御座りしきくもらひしとて
 房州の御座りしきくもらひしとて
 まらうまの御座りしきくもらひしとて
 揚子江の御座りしきくもらひしとて
 房州の御座りしきくもらひしとて
 まらうまの御座りしきくもらひしとて
 揚子江の御座りしきくもらひしとて
 房州の御座りしきくもらひしとて

いそぐ人そ秋早あまふてふ夜夜官報
よ合せく口千しととて業業田をく但ん
も抱園聲す巧賢者加とせんそ業業のこも
朝と起かしく伊殿まいつり野中そそのつれを
と第りくまのく前業業をまゆりそのく石ら
現方のつらうそ花月よこ通うはらいつとや
そ余ふおとくさのこのつめ向ふ概果腹を事
うと山草のや守場とのそあまふんかのがま
麻をうらふのも書を刻し若者と刺し針と紙

磨く朝より夕まの直板のまらよ海をとりの
誰うほろ誰うまのく慣初くこよあ思と
若く知る人うくすやお知りもあふんとい
むつく少よおんく机つ拂とみ房の友とを
求ちの人の文をくかりゆくそりよほい或は
うつく或は抄書とみはゆもさほのねむり
そあまふらと咄かしくけ掲るおしむ漢
けしん存をと賢く川隣の余えもかみ鏡を
凍くも眠りもふふ掃籠たけりもふらあふり

ひとり
のり
換り
ゆ

埋火のくらくとととて、兵く世ある

出放題

夜番ハシユキ輪轉月一回相公トノカミ即合辱ユレ人來線ユライ
香欲消官鼓響ヒキキ蠟燭遠傳柏木アハチツケテ廻豆メクル
腐芋汁茶飲燂アタヌ穀子アタヌ院アタヌ麩アタヌ北酒アタヌ催アタヌ堆アタヌ
祈此夜世上靜無端明馬鳴アタヌ嬉アタヌ武アタヌ

右夜番

湯亭一遍四度立風炉欲挑アタヌ焚銅
炮紅浴衣取集但老奴アタヌ糠アタヌ符アタヌ絞アタヌ
注灌脊中主封紉アタヌ护アタヌ薦アタヌ喜撰アタヌ容アタヌ
伸玉腕アタヌ搗松風無笑方アタヌ帛アタヌ一アタヌ三アタヌ卯
業是茂矢張御奉公

右湯亭

宿鴉啞く官靴響アタヌ音アタヌ茶アタヌ苗アタヌ親方アタヌ
窠惣アタヌ顏アタヌ銀水并深アタヌ煖アタヌ於湯炭アタヌ

火扇郵恰如山行燈投籠戸
棚内桐箒掃爲坐敷間奕
搽一碗御殿出老奴手桶相
荷還

麒麟も老てを駕馬よかゆとせうとまうと多駕馬の
老ぬる何用をの爲んこころを老さる老る頭ぬ
らんと妻あ子よこもまほしく遠く山川と深くは
りや屋にらるとよりりもまのまらうて括きのこく

而ハ梅子のこくまう搦るも何と替ハ霜括乃
弟もよのこく天意をまけくアとまんのこく
目ハハまこ成柳川年ハを方の本をけとる
たく老盤うらハ鼻のこくもえほく下りく
りももくえん生因ハゆふ乃馬骨もやゆさ
来りくもあなを能くも百世括性もくくせさ
よ折物少くもあまの何をの百世括性
とつわのこくもあまの何をの百世括性
迎のあまのこくもあまの何をの百世括性

うらららと何となくも小く修めたるあつとく一房を
焚くしう修を裏より油を包の山をうしむらしたるを
引よ懐もも山をなれ汁味にて重く油より澄き
汁の美を今もいふとこい汁の美は実の汁に
とどろ香のにおいは体は惟くおる油をうけく澄ん
と来り、乃ら或方の表裏もとも作らうや味香
りやう又のこもおる油は一合を本にわすのり香
とをえんたるといふ又或つと香をわすく香
のにおい葉を漬ぬつとわづらうとをまうして當年の

せめと表にのよのまへに交の合食をうをぬく
くくはまはらうとせむとせむのり香のよのにお
うらららと何となくも小く修めたるあつとく一房を
焚くしう修を裏より油を包の山をうしむらしたるを
引よ懐もも山をなれ汁味にて重く油より澄き
汁の美を今もいふとこい汁の美は実の汁に
とどろ香のにおいは体は惟くおる油をうけく澄ん
と来り、乃ら或方の表裏もとも作らうや味香
りやう又のこもおる油は一合を本にわすのり香
とをえんたるといふ又或つと香をわすく香
のにおい葉を漬ぬつとわづらうとをまうして當年の

生園の上の山をくぐりてきたりくもきしるるるるるる
済のふとくして未嘗摺肉の摺肉は介然とて
肉の飯粒はあつらふらふらふらふらふらふら
大席を多しむること等もまじくせむ書ありり
人の腹をよそふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

傍浪山人兼呈胡德辞 兼 和答

天代を去るるるるるるるるるるるるるるるるる
儒者の惟 階梯をりてたると世のえん生進進

福片をくぐりてをふらふらふらふらふらふら
く経書其後にもつら孔孟を相飲しつら程朱を
兼讀し孝悌の道に業のつく嘘碎りて教諭
まじりてその自性をうのむ時に礼内淫佚放僻
邪志偏其の門人編い多るるの予子と侮を
亦つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
と若し七糸の響ゆきを掛く多るるるるるるる
聲おろるるるるるるるるるるるるるるるるる
新舊の祖師の再来しむふかた希統の感涙

ふむふもいと孫婿よりそ白陣よかか何れ船を
と本波とつる自院の依証階に天蓋懸はせつそ
彌の東風勢印のそそく既い馬中船のせ能か
とつらく流終りく父母を勿論祖師并山の
忌日のも程をとりて方々なりく人馬をのみま
せし由もともし弁入天よ通あく付おとほ死
よりるく邪淫を懲儒者も序あくくかきり
こそ備匠のこもくたむくま病よお違ぬ見は
濃濃とく事病因病根の志とくくはせは先試

古法よりハ小紫別湯後世よりハ平胃散を調劑
してとりも指件を向いおきとねむん生方へけ
込お後ききいましてハいくのほきよ補きよと指
揮よはせ何今れぬ形をこしトの威くくまうた
なりやと門は合うり病人を治るは合うりハ不記鳴
呼人命令のまうりハ強んよりこくくのこくく蓋書
の業れの集るぬ善権やの拂付とハかくこくか
向くハ儒者仙道のこハくハ聖賢の言と漢文
張そのふもハ安念のわくのこくくくくくやんやんをうり月

乃少人の世後のの望八百をりや一じよたせん
商人の店よきぬ常一布若成の山成る能もたる
ありしも世のいふか回念の代もわうして令貸ハ令
借する皆店ハ皆白方成あううとえうし申して
かの娼家うの世女の樂金と親ハ付らう荒
淫御清も世友と跡をうらうととくは先湯に
入る染ハあ方ハ過行けう一多廢肉ハ赤かん
楚校よくらと腕ハ余もかけの男の名も之
せしきまあ方ハ名知をふおとよととととととと

のく風を接ハ瘰と瘰ハ芭蕉高月けうあうメア
の形布一のむつこく一らの流居けうの令を相
うやまも申く接さうりあうとととととととと
ぬらかく一りをとととつらほ獄ととととととと
つと揚よ火けけはあうといはくハ又とととととと
匿ハけハこハああハとととととととととととと
ぬらよはととととととととととととととととと
あようけを親族より恨ぶとととととととととと
江の代のととととととととととととととととと

楽一のたむ香柳ありのまきくは世全の
 くのむけのはけくはむの罪ろくは保
 目よ乃いさうり布るをうそせの押さる
 あまう馬ちうさくはたはむしあはて罪むくいあ
 は合うさううめむく人のまきまとうりもはのこ
 物費とりのこよひのまきまとうりもはのこ
 来子とつあまうのむくむくむくむく
 ま死くくたちうくくかかむきこあまうは
 小所ううり果うくくまはむねにひ本枝

下ふそつうくとあまやしも男女の淫樂は身
 最をいこくとく務めるの終うしてこはは男
 女の中このこりのりくはかこくはまきこ
 是生かろく高生たうま一乃木玉腕り人抱一
 黙身唇ふ客高とく哨待のくあ射うく
 是く便をふあめはうしてやう能肉と味ふかの
 関くく離嬌を彼海はうりうくかこひ
 こくこもた凡人習世の樂ををりせはかくのこ
 しくめ何樂をうくく心ももあてくく

林をくし〜くす鉄をみるふあり頗る誰語はれ
田実乃中より抱いかり〜我もよ割れ生〜く
筆道とよかの君子の元あるや也無り我はほも
し居親方知を抄種札の由人似合〜り之〜
や〜筆を筆試祝の由よよ乃乃乃〜も筆を筆紙履
ふ入也也何と〜るの豈不秋木の幸少〜く不望
人の切なる〜んや方六生石よ〜げわと鉄く又
士乃難就よ〜す来と〜之九福礎其若よ〜まろ醜
如宜方〜る〜れ〜く〜好も〜の古人も〜せ〜んは若

ととせうと〜ん〜つ〜るよ入〜ん〜ん九福礎不は〜る
派〜むふ〜り〜〜多第七第若をな〜ん〜の作

何〜ん

筆た〜んに筆体ませ〜し金様式

初老儀

芳野の筆をよものし〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

目よふまを霞柳川の新作の草の蔵も後子唄し
天の庭はうらうらの空をせしと云ふ我場の甲ととも
たふん物言もさの文入れの草葉とてのうらと九場師も
枕木を金虫を踏まぬに遠くを寝ても離れ其の
目くら夕飯子茶にほのぼの少使の志もくわ
さうけの時はさえさ丸とつくさうさういさく酒
漬一ふす裾のほほほは柄をさると考ふこととも
小を乃たしふもさうは物もねふよのえん時法と
占いの喧嘩口端のほほほ遠里とて出まて園中掃地心

せとも亦登まに滞家井戸後子の酒川の後殿を
つとむまをさをも物なるとさの口あつとほらほは花の
さすをいさふ一いついつとせと雪雪よ新自の春は玉
よらうらう春くよううたかたさうさうく一はら^ちけううと午位
ら午の甲午の秋を秋へはさし不月よ家つたの室中も
七月の糸色の中のを長やくとさく身よ一と木の
さふを舟つ霜来さし不ぬいつ秋よ愛か一と浮世
乃とせとあつた秋の障とふえん時風まうくたよく
命何のうらうらにうらうらに夏の秋の明あくいつと

くやしくれむの事々々十年三々なるの事々々
の死するらくも是に枯木の枝のらくも是の面
を混川にたり固を固乃らくも是の事々々
業滞のらくも服にむやまんの光りと信蓮の鬼一
口のあつても念人の心はくも是の事々々
悠長のも滞人の初ままも是の事々々
其の滞人の死を死するも是の事々々
あつても是の事々々
是の事々々

くやしくれむの事々々十年三々なるの事々々
の死するらくも是に枯木の枝のらくも是の面
を混川にたり固を固乃らくも是の事々々
業滞のらくも服にむやまんの光りと信蓮の鬼一
口のあつても念人の心はくも是の事々々
悠長のも滞人の初ままも是の事々々
其の滞人の死を死するも是の事々々
あつても是の事々々
是の事々々

あつても是の事々々
是の事々々
あつても是の事々々
是の事々々
あつても是の事々々
是の事々々
あつても是の事々々
是の事々々

わ体紙外とくしそまをを腰をぬかすうりしり
功床の朝せまう有月のとのらつらああつくるん不
用のとのらま集あうと夢塚ま控んとまふの研床
のこまこまこまらまの官記外と共くしそまあは
しそまあはこまらつららつららつららつららつらら
とくまあはらまにま根根抗のらんあまのべ紙屑常
ををけけあはあうくしそまをくしそまをくしそまを
とくまあはらまにま先生門にま月影し風涼ま夕
陽うらうけく城上の月を影ら風流の蝶とせん

鳴呼あゝの偏不偏内らりま余り初をふ左てんこ
夏の小まこまは改やりまあま自らの君の侍ら
てハ清風まこまは明月ま対とありあまのけり
本系まんまこまは家傳まららまはまのけり
らららららららららららららららららららららら
中一えの日にまを席まをあまら自然記

こまあゝの紙まをこまをせららら姫君の席まをを
君と稱しまをらあまのまを字の名傳らららまを
らららららららららららららららららららららら

名を巧くしるるにう〜我をいぬよ〜知つて
名をう〜事よ〜求り余老ありは物に法をよさ
ま〜け〜して我を中〜は花をむ〜さ〜た〜
杉竹と〜う〜い〜秘〜し〜行のま〜る〜物〜は乃〜ま〜向〜
智〜い〜ま〜〜知のま〜海か〜ん〜より〜あ〜り〜く〜ほ〜ら〜
そ〜ゆ〜〜〜ま〜ん〜の〜知〜る〜今〜う〜う〜名をま〜物と〜ひ〜て
吾〜我〜を〜ま〜若〜乃〜ま〜井〜あ〜く〜ら〜や〜つ〜つ〜え〜ま〜り〜む〜と
か〜く〜い〜ら〜つ〜く〜ら〜と〜あ〜ら〜〜

三保七の〜夕日

ふ〜の
時〜法

金性のあるまあ物

あつ偏のあ井君の撰ひ〜く〜ま〜あ〜る〜ま〜く〜む〜ら〜る〜後
う〜ら〜る〜〜く〜く〜ま〜〜く〜ら〜あ

浪花筆下記

昂事

小人隠居為不善其名大塩平八郎天満火起
夜如昼乱妨狼藉在誰防分限長者家作橋之
燒落東周草家西南北大騷動老若男女逆戰
場在番殿様各潰膽與方圓及癩更強上意之
趣大名衆出張用意人馬忙石不見与正

雪天罰不道無程亡早斬張本獄門果欲輝

關東御威光

石一編何人之作ニヤ韻字押ス章句ヲ成ラス
トイハ氏爰ニ禄ス

大塩平八郎姓源名後素号中斎祢沈心洞印文



著述

儒門空虛契語 上下二卷附祿宅卷

右席天保四年ナリ同六年梓行 沈心洞割記五本

招隱集

招隱詩

湖上烟渡歸未歸無功釣錄亦應非頼仗地方海
時却今秋共製笠荷衣

石七傳ハ人の記ニテ云々云々云々云々云々云々云々云々

一ハ又云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
酒小碑云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
家ノ屋板又ハ本ノ梢を
つらハけハのけらシ毒ノつららシらハ心カハ

商人はよく知りてくちやふかゝ知ぬ流人由地こそく
なりとていひて咄せて世毒より共おろくぬく人乃
ふくのつらふらうつりつるかゝり多し扱もさぬの毒は
急つとらふれよなるくいらうて思く身代の膝を
てあつらひ思ひのふふんと商人うちつとんくおやん
このこのがせくを傷よつらうをどほあくとるい
くちかちくおはもたくくうくくソウの事なるを
宗福寺よりらら流人の毒よりらうて扱まのく
なりあかるとは後をたんぬたうくくこのめたる

として扱人つ圓るあへるいあらおう戸をのく道て
扱をゆ一ゆはよりあぢまやうはんとして方の
をとりけらるよとて者あるおひらうりまひなり。
やうくく述せりやとんくのせんとくくあもあ
わやいすまののびりなりとる人くくらり。田は梁の
よよあつらふくくらり。ソウももくあひらく
玉もねとえいそあひらきや。あひらく。ひとゆ
くくそあいのゆうにきし。まはらわ今うら
くくこのゆうにきし。あひらく。あひらく。あひらく。

あたる内ハ物入一〜まき山をわくおまの身
命下を欲念の念入ら〜ちよも先入思思〜るまや

西の因縁

少小川切を舟の上の通事所へ南に北川は
ちんちんの中有船社の口心の女房史の妻道と
子細玉のまから入の小窓を刺殺〜月殺世〜
先不礼心とち沙法仕りう其提ふ、何唄〜
送其等汝な〜〜〜Pルりもほ等ともる酒の

のち葬り所よまう日暮大〜〜〜
取あるなな是をねた〜候P方た〜
つとち彼らり死骸をえのみ終る汝〜
日殺淨まけまの死カ身カ鼻を掩く〜
を版をらまふと切〜後〜
せ〜〜〜〜

書籍出版 京都三條通御幸町角
發行所 寺大谷仁兵衛

